

モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究 その3

—遊牧民と集合住宅居住者の比較からみた生活環境の傾向的特性について—

日大生産工 ○北野幸樹 日大生産工 川岸梅和
モンゴル科学技術大 1. ゴンチグバト 日大生産工 広田直行
日大生産工（院）杉本弘文

1. はじめに

本報はモンゴルの遊牧社会が有する環境負荷が極めて少ない生活体系と遊牧民が伝統的な遊牧社会の中で育んできた生活・コミュニティ意識及び活動等との関係性に視座を置き、モンゴルが伝統的に有する固有の地域特性を如何にして保持し、都市社会に展開していくことが可能か、モンゴル独自の生活空間・環境づくりの方向性を検討し、今後の環境と共生した持続可能な社会・生活環境の計画的な方法論の構築に向けた「モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究」の続報である。

前報ではウランバートル近郊に暮らす遊牧民とウランバートル都心部の集合住宅地区の居住者（都市生活者）に対する生活意識・活動実態等に関するアンケート・ヒアリング調査の比較から、遊牧民の生活・コミュニティ意識の傾向的特性について以下の基礎的知見を得た。1）遊牧民は近隣地域において積極的にコミュニティを育み、互いに協同（働）することで遊牧生活を継続し、かつ生活環境を豊かにしている。同時に、日常生活での家事（子育て等）や余暇活動においても繋がりがみられる。2）遊牧民は生活空間として自然・周辺環境を活用しており、家族や近隣世帯と協同して自然・周辺環境を良好に保ち、受け継ぐことにより、生活環境を豊かに感じている。それは、生活環境への高い評価や満足度に反映されていると共に、遊牧固有の生活スタイルを継続していく意識の高さに表れている。

さらに、筆者らのこれまでの遊牧民と集合住宅居住者の比較を通じた調査・研究により、1）遊牧生活においては生活環境と自然環境とが密接に関わり合い、生活（自然）環境を協同して保つことで遊牧を営み、生活を継続させていると同時に、良好な子育て環境や高い自然環境への意識、伝統意識を育んでいる。それは生活環境への高い評価や満足度と関連しており、生活環境における自然環境や子育て環

境の充実が生活環境を評価する重要な要素になっていること。2）遊牧生活においては自然災害の増加、教育環境、保健・医療環境の不備が大きな問題点として捉えられていること。3）都心居住においては種々の施設や設備が充実する一方で、モンゴルの遊牧生活が伝統的に保持してきた人と人、人と自然の共生、そして資源の循環性を基盤とした生活スタイルや生活の知恵を失い、自然環境や子育て環境に関する不満の増大や伝統意識の喪失といった問題を抱えていること。等が明らかになっている。

2. 研究の目的

本報においては、遊牧民及び集合住宅居住者に対する生活意識・活動実態等に関するアンケート・ヒアリング調査を行い、それらの実証的データを基盤として遊牧民及び集合住宅居住者の生活環境と生活・コミュニティ活動等に関する意識特性の関係性について両調査の比較・分析から検討し、遊牧民と集合住宅居住者の意識特性・活動特性の類似性と差異性について明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究で調査対象としているのは、ウランバートル近郊に暮らす遊牧民及びウランバートル市街地に立地する集合住宅地区に暮らす居住者である。

研究の方法は、前報と同様であり、2006年8月に実施した遊牧民を対象としたアンケート・ヒアリング調査及び2007年9月に実施した集合住宅居住者に対するアンケート・ヒアリング調査の比較・分析を行う。尚、アンケート調査の概要を表1に示すと共に、両調査地の位置を図1及び図2に示す。

表1 アンケート調査の概要

遊牧民に対するアンケート調査			
	調査地A	調査地B	合計
配布数	28	29	57
回収数	28	29	57
回収率	100%	100%	100%
集合住宅居住者に対するアンケート調査			
配布数	120		
回収数	98		
回収率	81.7%		

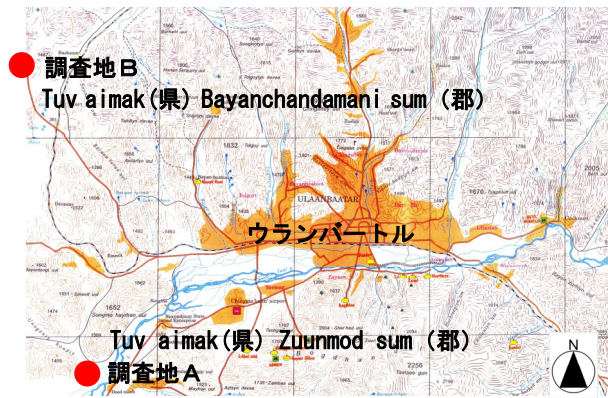


図1 遊牧民アンケート調査・調査地

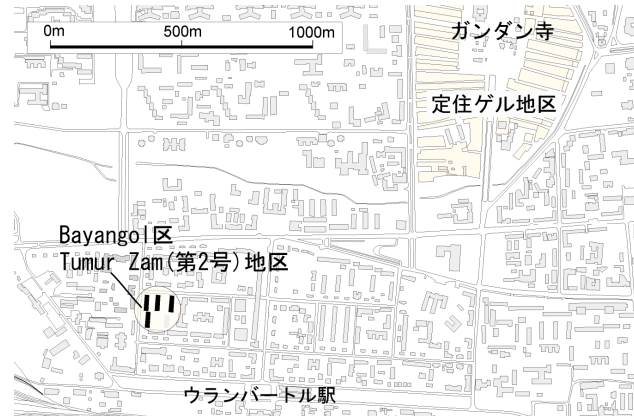


図2 調査対象集合住宅 [BAYANGOL 区 TUMUR ZAM (第2号) 地区]

4. 調査結果

4. 1 生活・余暇活動について

4. 1. 1 活動・行為の傾向と特性

各調査対象世帯に対し、アンケート調査と共に 1 日の活動内容及び活動時間を記入する調査シートを配布し、世帯主より回答を得た。

調査結果より、遊牧民の活動の特性を整理すると、先ず活動場所として、「ゲル内及びゲル周辺」と「牧草地」に分類することができる。また「牧草地」においては、「放牧」を行いながら、他の活動（休息、家畜の世話（手入れ）等）も並行して行っている状況がみられた。遊牧民が 1 日の中で行っている活動項目に関しては、すべての世帯及びグループ（ホト・アイル）において大きな差異はみられない。アンケート・ヒアリング調査によると、1 日の生活行動パターンは各世帯によって決まっており、ゆったりとした時間の流れの中で、平日及び休日に関わらず毎日同様の活動が繰り返されている。各活動項目における活動時間量の上位 3 項目は「放牧」「搾乳」「乳製品づくり」となっており、これらが遊牧民の主要な活動項目となっている（表 2）。また、遊牧民はこのような生活活動を行っている中で、「会話を楽しむ」「子どもの遊び」「子どもの相手をする」「運動をする」「ラジオを聞く」「ペット（犬）と遊ぶ」等の余

暇活動を柔軟に楽しんでおり、生活活動と余暇活動が極めて近く、浸透した関係性を持ち、広大な牧草地を含み込んだ生活環境において生活活動と余暇活動を相互に重なり合わせながら、種々の活動を展開している。

集合住宅居住者の活動の特性^{注1)}を整理すると、平日・休日共に、活動項目のうち「食事をする」「休息する」「テレビを見る」が上位 3 項目となっている（表 3）。平日・休日の活動状況を比較すると、「郊外（草原地）に行く」の時間量が休日のみにみられる。これはウランバートル郊外（草原地）に別荘（ズラン）^{注2)}を持つ都市生活者の多くは休日に草原に行き、草原で過ごす傾向があり、調査結果はこのことを反映していると考えられる。

表 2 遊牧民の活動特性^{注3)}

			1FIG	2FIG	3FIG	4FIG	合計			
主要活動項目	牧草地での活動	生活活動	放牧 (小屋に入れる等 も含む)	活動時間量 (分)	5130.0	5070.0	3360.0	3960.0	17520.0	
			1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	466.4	460.9	480.0	565.7	486.7		
			家畜の世話 (水やり等)	活動時間量 (分)	270.0	375.0	420.0	360.0	1425.0	
			1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	24.5	34.1	60.0	51.4	39.6		
	ゲル内及びゲル周辺での活動	生活活動	搾乳	活動時間量 (分)	1395.0	1650.0	1335.0	705.0	5085.0	
				1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	126.8	150.0	190.7	100.7	141.3	
			掃除	活動時間量 (分)	585.0	735.0	120.0	120.0	1560.0	
				1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	53.2	66.8	17.1	17.1	43.3	
			乳製品づくり	活動時間量 (分)	1455.0	750.0	525.0	435.0	3165.0	
				1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	132.3	68.2	75.0	62.1	87.9	
		余暇活動	馬乳酒づくり	活動時間量 (分)	375.0	240.0	180.0	285.0	1080.0	
				1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	34.1	21.8	25.7	40.7	30.0	
			食事をする	活動時間量 (分)	405.0	810.0	135.0	270.0	1620.0	
				1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	36.8	73.6	19.3	38.6	45.0	
			お茶を飲む	活動時間量 (分)	615.0	450.0	135.0	405.0	1605.0	
				1日1人当たりの 活動時間量 (分/人)	55.9	40.9	19.3	57.9	44.6	
			世帯数(回答数:人数)			11	11	7	7	36
			総活動時間量(分) 〔主要活動項目以外も含む〕			10980.0	10770.0	6840.0	6810.0	35400.0

表 3 集合住宅居住者の活動特性^{注3)}

			平日	休日		
主要活動項目	生活活動	家事 (洗濯等)	活動時間量 (分)	180.0	1110.0	
			1日1人当たりの活動時間量 (分/人)	4.5	34.7	
	余暇活動	食事をする	活動時間量 (分)	4020.0	3390.0	
			1日1人当たりの活動時間量 (分/人)	100.5	105.9	
		テレビを見る	活動時間量 (分)	1860.0	3270.0	
			1日1人当たりの活動時間量 (分/人)	46.5	102.2	
		休息する (フリータイム)	活動時間量 (分)	1920.0	2520.0	
			1日1人当たりの活動時間量 (分/人)	48.0	78.8	
		郊外(草原地)に行く	活動時間量 (分)	0.0	1080.0	
			1日1人当たりの活動時間量 (分/人)	0.0	33.8	
		ショッピングをする	活動時間量 (分)	240.0	1440.0	
			1日1人当たりの活動時間量 (分/人)	6.0	45.0	
		総活動時間量(分) 〔主要活動項目以外も含む〕			9810.0	17730.0
		世帯数(回答数:人数)			40	32

4. 1. 2 行いたい活動・行ってほしい活動

アンケート調査より、今後「行いたい活動」「行ってほしい活動」について、自由回答により意見を抽出した。これらを整理し、得られた知見をまとめると以下のようである。

遊牧民においては、「色々な教育をしてほしい」以外に、「羊の毛の加工技術を教えてほしい」「牧畜技術の講習をしてほしい」といった牧畜技術等に関する学習機会や「自然の野生植物を家庭の医療にどう生かせばいいか、その収穫時期や保存方法、伝統的な使い方などを教えてほしい」「健康セミナー」「定期的な健康診断を行ってほしい」等、医療や健康に関するサービス・支援活動を求めている意見が多く挙げられた。また、文化的な行事（祭りやイベント）、娯楽的な催し物（映画、コンサート、お芝居）等の余暇を楽しむ機会を求める意見が挙げられた。加えて、「社会のなかで起きていることについての講演会」「国の政策や方針に関する説明会」「情報交流のためのセミナー・ミーティング」等、種々の社会的情報を得るための機会を求める意見が挙げられた。

一方、集合住宅居住者においては、「ゴミの分別、清掃活動」、「子どもの教育や環境問題に関するセミナー」、「植栽（植樹）活動」といった意見が多く挙げられた。これはゴミ問題や環境汚染問題^{注4)}に対する問題意識を持つ居住者が多いことが反映していると考えられる。また、「（近隣地域の）労働者同士や近隣住民の交流会」「近隣地域でのスポーツ大会」「情報交流の機会」「ゲーム（パカラ等）」等、近隣住民や居住者間での交流の機会を求める意見が挙げられた。一方で「（求めている活動は）特にない」といった消極的な意見もみられた。

4. 2 遊牧生活及び都市生活の良い点・悪い点

アンケート調査において、遊牧民・集合住宅居住者それぞれに遊牧生活及び都市生活の良い点・悪い点について自由回答により意見を抽出した上で、項目別に整理し、図3、図4にまとめた。尚、高齢の遊牧民の中には都市で生活した経験のある人が多いことが判明している^{注5)}。遊牧生活及び都市生活に対する意識特性について以下に得られた知見をまとめる。

4. 2. 1 遊牧生活の良い点・悪い点

遊牧生活の良い点（プラス要素）に関する意識を抽出すると、遊牧民・集合住宅居住者に共通して、「自然（生活）環境の良さ（緑・空気、騒音の少なさ等）」「家畜からの豊かな恵み（乳製品、食糧等）」「自給自足の生活」「伝統文化の継承」「健康的な生活」が挙げられた。遊牧生活の良い点に関する認識は遊牧民・集合住宅居住者共に類似した傾向を示しており、大きな差異はない。

一方、遊牧生活の悪い点（マイナス要素）に関する意識を抽出すると、遊牧民・集合住宅居住者に共通して、「自然災害の影響を受ける（リスクが高い）」

	遊牧民	集合住宅居住者
自然（生活）環境	自然環境を汚染せず影響のないように暮らしている。豊かな自然や家畜からの恵みでゆったりとした幸せな暮らしができている。 自由に生活できるし、豊かな自然やきれいな空気の中で、健康な食糧品を食べながら暮らすのが最高。自然になにかの影響が無いよう自然と共に生活し、素晴らしい自然を子ども達に引き継いでほしい。 自然と直接関わりたい、きれいな空気と水があって、ストレスが少なくゆったりとした生活ができる。 きれいな空気や豊かな自然の中で暮らし、食べ物も健康的である。 自然災害の影響を受けること。 自然災害は本気でどうしようもない。 （自然災害は厳しいが）自然災害の際は家畜や家族を守り、近所の人々との助けあいに対応している。 自然災害の時は苦労するが、自然の中で家畜を飼養しながら暮らしている今の生活には満足している。 自然災害（大雪、強風、洪水等）は大変だが、家畜の飼養を楽しんで暮らしている。	空気がきれい。ストレスを溜めずに生活できる。 常に綺麗な環境に囲まれており、よく運動し、健康的である。 空気がきれいで静かで安全に暮らすことができる。 空気が土壌や良く、幼い頃から慣れた環境は気持ちいい。 きれいで健康的な空気の中で暮らすことができる。 大自然に近く、空気がきれい。 きれいな空気、のんびりとしていて平和で健康に良い。 きれいな空気、きれいな水ほど健康に良いものは無いと思う。 自然のリスクが高い。最近では生態系のバランスが崩れている。 ソドや凍害、牧草地の問題など、トラブルが多い。 ソドや凍害などの自然災害が多い。 寒冷期は快適に過ごせるとは言えない。 生活が天候（曇り、寒害等）に依存して（左右されて）しまう。 自然災害で家畜を失う恐れがある。
生活スタイル・生活状況	自然に負荷をかけずに、自給自足の生活ができる。 都市の生活と比べると、毎日の食べ物はお金がからずにお手頃で、静かな環境で空気もよく、精神的なストレスを感じずに毎日ゆったりとした生活が送れている。 自由に自然に生活をしていけることが何よりも良い。 移動は大変だが、いつも繰り返し移動する中で色々な人々と出会い、新しい人々ができるのも楽しい。 遊牧生活をするのは自然災害の影響を受ける可能性が高リスクがある。しかし、経験豊富な遊牧民や先祖から受け継いだ自然とのコミュニケーションの知恵、経験を活かしながら厳しい自然の中で暮らしを続けている。	他人に依存しない自由な生活ができる。自分で仕事（牧畜業）さえできれば、普通の暮らしができる。 一か所に制限された範囲内に住む必要がなく、自由。自分の住むところがあり、アパートなど探す必要がない。 家畜の牧草を過って移動する生活スタイルは悪くない。占領で遊牧民も私生活も家畜の恵みを得られる。 きれいな空気の中で、自由に時間に縛られない生活ができる。 空気が健康的で、家畜の世話だけで十分に生活ができる。 家畜のお陰で全てのニーズ・需要が満たされる。 家畜の世話をし、きれいな空気を吸って暮らす。輸送ののんびりしている。 生活のリズムがのんびりとしている。 自由。独立して生きていく力がつく。 衛生的で快適な暮らしができない。 家畜の世話には誰にでもできる簡単な仕事ではない。経験が浅い人は損をする人が多い。 仕事（家畜の世話）で一年中忙しく、自由時間がない。 遊牧民の生活は、（家畜の世話など）することが多く、手間はかかる。
インフラ整備状況	都会に比べて現代化が遅れ、情報などが手に入りにくい。 インフラ（水道・電気等）や医療施設などの普及が十分ではない。 電気、通信等のインフラが普及していない。	電気・水道等、インフラが発達していない。 衛生的に近く、毎日シャワーやお風呂に入るのが困難。 ニュースなど、情報が遅れて届く。 全てが原始的で大変だと考えられる。 現代社会から完全に離れている。 情報がなく、インフラが発達していない。都会に比べ発展が遅い。
施設整備状況	医療施設等のある場所に暮らそうとすると家畜には危険な場所。水や草の多い場所に移るようすると医療施設などが遠くになってしまう。 医療サービスは自給の食料にあって欲しい。緊急事態の時以外は医師の来を要することがないくらいだ。 近くに病院がないので、診療や治療を受けることができない。 薬や診療などは必要な時に受けることができる。 幼稚園や学校が近くにないのが苦労する。教育環境（レベル）が良くない。	病院が遠い。 社会・医療・福祉サービス（病院等）がなく、遅れている。 各種サービスから離れており、健康が心配。 社会保障が悪い。 子供の幼稚園や学校が遠い上、教科書や教員が不足している。 学校が遠く、困ることが多い。 教育環境が悪い。
伝統・文化的意識	先祖から受け継がれてきた遊牧生活を継ぎ、子ども達と良い生活ができている。 モンゴルの文化を子ども達、若い人達に伝えていける。故郷や国を愛する意識を育てていける環境である。 遊牧文化は母なる自然に悪影響がなく、省エネで生活に必要な全ての要素を自然に備えている環境であり、自然に関わり合い共に生きていく最適な暮らし方である。 親から受け継いだ暮らし方を子供達に引き継ぎ、昔からのモンゴル文化や習慣を次世代に伝え残すことができる。	子供にモンゴルの伝統的な文化を伝える。家畜を子供に譲渡できる。 遊牧民の伝統を伝える。 遊牧は文明から遅れている。 生活レベルが現代人に必要な程度より遅れているのは明らか。

図3 遊牧生活の良い点・悪い点（良い点：色なし、悪い点：色あり）

「医療サービスの不足」「教育環境の悪さ」「インフラ（水道・電気等）の未整備」「情報の遅れ」が挙げられた。遊牧生活の良い点と同様、遊牧民と集合住宅居住者で遊牧生活の悪い点に関する認識に大きな差異はないが、遊牧民は「自然災害の時には苦労するが、自然の中で家畜を飼養しながら暮らしている今の生活には満足している」「自然災害（大雪、強風、洪水等）は大変だが、家畜の飼養を楽しんで暮らしている」「移動は大変だが、いつも繰り返し移動することで、色々な人々と出会え、新しい隣人ができるのも楽しい」「（自然災害は厳しいが）自然災害の際は家畜や家族を守り、近所の人々との助けあいに対応している」等、マイナス要素の中にもプラス要素を見出し、現在の遊牧生活に対する満足度が総体的に高い傾向^{注6)}が窺える。

4. 2. 2 都市生活の良い点・悪い点

都市生活の良い点（プラス要素）に関する意識を抽出すると、遊牧民・集合住宅居住者に共通して、「自然災害を受けた際のリスクの少なさ」「教育環境の良さ」「インフラや施設の整備状況の良さ」「情報入手のしやすさ」が挙げられた。遊牧民と集合住宅居住者の意見を比較すると、遊牧民の都市生活の良い点に関する意見数は少ない傾向がみられると共に、遊牧民は若者や子ども達が都市に住むメリットを多く挙げている。

一方、都市生活の悪い点（マイナス要素）に関する意識を抽出すると、遊牧民・集合住宅居住者に共通して、「生活環境（騒音・大気汚染等）の悪さ」「ストレスを感じる事」「犯罪の危険が多いこと」が挙げられた。特に、集合住宅居住者においては、「生活環境（騒音・大気汚染等）の悪さ」に関する意見が多く挙げられた。また、遊牧民においては「他人と関係なく自由に暮らしたいと思う。遊牧生活をしている私達には隣人組合は合わない」「近所付き合いが煩わしい」「私達は昔から自然のなかで遊牧生活をしてきたので定住にはなかなか慣れないと思う」「自然の摂理に従い、他人との関係を保った暮らしをしたい。家畜を飼育し、このライフスタイルを子供たちに引き継いであげることを考えている」といった意見が挙げられると共に、集合住宅居住者においては、「人口密度が高く、落ち着いた暮らしを送ることが少ない」等の意見が挙げられ、遊牧民が古来から継続し、受け継いできた遊牧民固有の暮らし方が、人と人との関係性（他

者との関係性）、人と自然との関係性に関する意識を醸成してきていると言えよう。

5. まとめ

得られた知見を要約すると、以下のようなものである。

- 1) 遊牧民が行っている活動は生活活動が中心であり、余暇活動に関しても、「食事をする」や「お茶を飲む」等、生活活動と重層する活動が多い。しかし、遊牧民は主要な活動である「放牧」「搾乳」「乳製品づくり」等を含めて、家畜や人との触れ合いを楽しみ、生活活動と余暇活動を極めて近い関係性の中で展開していると言えよう。一方、集合住宅居住者においては、「テレビを見る」や「ショッピングをする」等が余暇活動として顕在していると共に、休日の余暇活動として「郊外（草原地）に行く」が見られ、都市生活者が草原に回帰する現象が見られる。加えて、環境問題に関する関心も高い。これらはモンゴル人固有の意識特性として位置づけられると共に、少なからず都市生活者も自然環境に身を置くことを求める「遊牧民的性格」を有していると言えよう。
- 2) 遊牧生活及び都市生活に対する意識（認識）は概ね類似した傾向がみられる。しかし、遊牧民の多くは、高い伝統意識や自然環境への意識を基盤として遊牧生活のマイナス要因のみならず、遊牧生活の楽しさの両面価値を認識し、人と人、人と自然、人と家畜との良好な関係性を構築し、環境負荷の少ない暮らしを実践している。

モンゴルの生活・居住環境づくりにおいては、上述したような意識・活動特性を把握し、地域特性に立脚した生活空間をデザインすると同時に、コミュニティデザインを実践していくことが肝要であり、ハードとソフトの両面から良好な「生活環境デザイン」を実現していくことが重要であると言えよう。

〈注釈〉

- 注 1) 仕事（労働時間）を除く活動項目より時間量を算出している。
 注 2) 都市部の集合住宅居住者の多くが持つ郊外の別荘をズランと呼び、主に夏季に利用する人が多い。
 注 3) 表においては、1人1日当たりの活動時間量が30.0分/人以上の活動項目を抽出し、主要活動項目として掲載している。
 注 4) 近年ウランバートルにおいては大気汚染問題、廃棄物処理問題、土壌汚染、水質汚濁等が重大な社会問題となっている。
 注 5) 2006年8月に実施したヒアリング調査により判明している。一方、遊牧生活の経験のある集合住宅居住者は4.4%であり、遊牧生活をしている親族のいる集合住宅居住者は46.6%であった。〔集合住宅居住者に対するアンケート調査（2007年9月）〕
 注 6) 前報（その2）による。

〈本研究に関連する既発表論文（既報）〉

- 1) 杉本弘文、川岸梅和、北野幸樹、広田直行：遊牧民と集合住宅居住者の比較からみた生活環境に関する生活・コミュニティ意識の傾向的特性について ―モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究―、日本建築学会技術報告集 第27号 pp. 213～218、2008年6月

〈参考文献〉

前報と同様である。

	遊牧民	集合住宅居住者
自然生活・環境	都会での定住はしたいと思う。自然環境は良くないが、リスクは少ない。 都会は大気汚染や騒音などがあるので暮らしたくない。 都会は空気が汚れているし、自然の摂理にそって暮らしている。 自然環境が悪い。私達は自然の摂理に従い、他人との関係を保った暮らしをしたい。家畜を飼育し、このライフスタイルを子供たちに引き継いであげることを考えている。	〔自然災害の〕リスクが一切ない。 自然災害の時に家畜を追う必要がなく、暖かい家にいられる。 多くのストレス、大気汚染、騒音などがある。交通渋滞も多い。 大気汚染が酷く、ストレスが溜まる。 騒音、煙、埃が増え、のんびりと安らかに暮らすを送れる日は少ない。 人口密度が高く、土壌汚染、ゴミの問題がある。
生活スタイル・生活状況	〔都市では土地が私有化されているが〕土地はみんなの共有資産であると思う。他人とは関係なく自由に暮らしたいと思う。遊牧生活をしている私達と隣人組合は合わない。 近所付き合いが煩わしいと思う。自由に暮らしたいので定住は考えていない。 長年に多数の人と一緒に暮らすのは簡単ではないと思う。近所とはコミュニケーションをとりながら遊牧していくのが良い。 私達は昔から自然の中で遊牧生活をしてきたので、定住にはなかなか慣れないと思う。	人間同士の信頼関係が悪い。 人間関係が悪く、昔人間的な行動をとらない（信頼関係がない）。 誰、自分のことしか考えていない。 都会では様々な犯罪が多発している。 最近では、町の人口、車の数が増える一方で、建物の間隔は非常に近接してきており、人口密度が高く、落ち着いた暮らしを送れる日は少ない。 今住んでいるビルをいつどこかの金持ちが壊すかもしれない。 食の安全性がない。
インフラ・整備状況	インフラ（電気・水道等）設備が充実、便利な住宅がある。 全てがきれいで衛生的。金さえあれば不満はない。 情報入手が簡単で早い。 インフラや設備などが良い。 都会は全て（各種施設、情報、サービス等）に近く発展している。	〔近年の建設ラッシュにより〕インフラ（水道設備等）の消耗が激しい。 人口・建物の超過、暖房・電気・水道の供給が不安定。 無計画に建てられた建物が多い。地震や火事などのリスクが高くなっている。道路が悪い。
施設整備状況	子どもに良い学校に入ってもらいたいので、都市へ移住したい。 自分は都市に移住する予定はないが、子供は将来を考えてウランバートルに移住させたい。	病院が近い。 学校、幼稚園などが近い。 社会・医療・福祉サービス（病院等）が良い。近くにある。 〔教育環境が良く〕子供の将来、勤学（教育）、人生のためになる。 全面的なサービス（医療・福祉、教育など）が受けられる。 子どもが遊べるきれいな環境（公園・広場等）がない。 子供の幼稚園や学校が近く、教科書や教員が安定している。 〔屋外共用空間での建設事業などにより〕子供の遊び場がだんだん少なくなっている。 子供達の教育に関するものが近くにある。自分で学習できる環境がある。

図4 都市生活の良い点・悪い点（良い点：色なし、悪い点：色あり）